

第2回報告

2回目は10人が参加しました 百里基地反対闘争前史 ―茨城の基地反対闘争―

8月23日(火)に百里公民館で、2回目の「百里を語る会」が行われ、1回目より1人多い10人が参加しました。この学習会は、百里基地反対闘争の歴史的事実を広く深く、当時の日本さらには世界情勢の中で確認することと、その闘争の意義を検証し今後の百里基地反対運動さらには平和運動につなげていこうと開始したものです。



2回目となる今回は、1回目同様伊達郷右衛門さんが講師となって、百里基地反対闘争の前史となった、「神ノ池軍事基地反対闘争」を中心に、参加者と共に自由に語りました。伊達さんは、主に県労連の記念誌を資料として、基地建設阻止に成功した(勝利した)「神ノ池軍事基地反対闘争」の経過と勝利の要因を分析してくれました。戦後10年にあたる1955年は、防衛庁による茨城県内各地への基地建設計画が表面化した年でした。旧筑波海軍航空隊跡(友部町)、大洗町那珂川河口の「米軍救難艇基地」計画、そして「神ノ池」、「百里」です。どこでも反対運動が起こり、「百里」以外では計画が頓挫しました。「神ノ池」では防衛庁の切り崩しにより、鹿島町長・町議会が反対から賛成に転じるといったことも起こりましたが、結局、防衛庁は1956年には建設を断念しました。しかし「百里」では小川町長幡谷仙三郎を中心に水面下で航空基地建設計画が進行していました。この時期、全国では「砂川闘争」と「沖縄基地闘争」などが闘われていました。伊達さんはそれらと対比しながら、百里基地闘争の特徴を3つ指摘しました。「町政民主化」闘争の弱さ、幡谷財閥の財政私物化、開拓農民の農業意欲の低さです。これらについては、次回に詳しく取り上げる予定です。